

「見立て」に着目した造形表現の研究

関崎 哲

A Study of the Formative Expression Based on the Technique of “Mitate”

Satoshi SEKIZAKI

要約

本研究では、「見立て」という活動について、あらためて考えてみるとともに、子供たちの作品や本学学生の課題制作の過程を、「見立て」という観点から検証し直し、今後のカリキュラム作成や実際の指導の場面で生かしていくための方法を探ることを目的としている。

「見立て」という活動は、造形活動の多くの場面において、その個人の生活の経験とともに重要な役割を果たしている。「見立てる」活動は、組み立てる活動とともに、まねる活動を引き出す。そして、そこから細部にわたる表現へのこだわりや、自分の思い描くイメージと自分が表現したものとの“ずれ”に気付くような、客観的な見目を養うことになり、個性的な表現の実現へと向かっていくきっかけとなる。このことから、幼児造形に携わるものを育てていく上で、指導者となるその本人が、この「見立て」の活動をしっかりと理解し、「見立て」を意識した造形活動を経験することが、実際に子どもたちの造形表現の指導や援助をしていく上で重要な意味を持つものと考えられる。

キーワード：造形表現、幼児造形、見立て

1 はじめに

本学児童福祉専攻の造形の演習授業の中で、「見立て」による造形カリキュラムを実施した時のことである。この課題は、集めて来た木切れや木の葉などを使用し、何かに見立て、最低限の加工で造形作品を作っていくというものであった。その授業で、すぐ「見立て」活動ということを理解し、自分なりのイメージを膨らませて制作に取りかかる学生たちの中に、この「見立て」ということがなかなか理解できず、集めて来た木切れや木の葉などを、何ものにも見立てることができずに、課題作品の制作に取りかかれない学生が何人か見られた。

このような学生と話をしていくうちに、造形活動の多くの場面、特に表現の出発点において「見立て」という活動がいかに重要な役割を果たしているか、今一度考え直す必要があるのではないかと考えるようになった。

本研究では、あらためて「見立て」という活動について考えてみるとともに、子供たちの作品や

学生の課題制作の過程を、「見立て」という観点から検証し直し、今後のカリキュラム作成や実際の指導の場面で生かしていくための方法を探ることを目的としている。

2 造形表現における「見立て」の活動の持つ意味

「見立てる」活動にうまく取り組めなかった学生について見た場合、最も大きな原因として考えられるのが描画活動経験の不足ということがあげられる。ここでいう描画活動とは、テレビ等のメディアに登場するキャラクターをお手本として描いたり、既に描かれた何らかの表現物を再現したりするというような二次的な描画活動のことではなく、自分の心の中に思い描くものを直に表現するような直接的な描画活動の経験のことである。

このような描画活動の過程を考えてみると、そこにはその個人の生活の経験と「見立てる力」というものが、描画活動の過程に大きく関わっていることに気が付く。例えば、心に思い描く複雑な事柄は、相当な訓練を積んだ芸術家でもない限り、ストレートに目に見える形として描きあらわすことはなかなか難しいものである。そこで、人はその個人のこれまでの経験の中や、今生活している周辺の事柄・ものの中に、その表現したい内容が擬似的に現れているものを探して、引用し、自分の描画表現の基本あるいは助けとして利用する。次に、見立てることによって現れた自分の表現を客観的に見て検証し、より自分のイメージに近づくように工夫を加えていくのである。この工夫の中にも、先ほど述べたことと同じように、より表現したい内容が擬似的に現れているものを探して、さらに引用を重ね、より自分の表現したい事柄に近いものを形にして行こうとするのである。

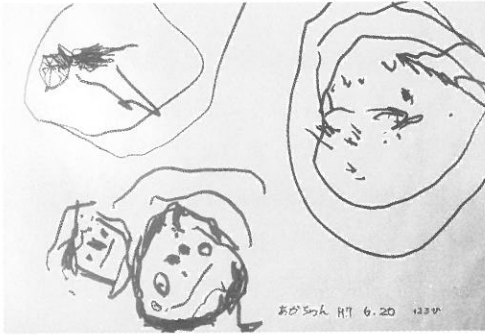
ここで述べたような表現活動における見立ての活動の関わりは、絵を描く場合のみに留まらず、何か他の立体的な造形物や、造形表現以外の、たとえば音楽や言葉による表現、さらには身体表現の分野まで、同じように重要な関わりを持っているということができる。

3 子どもの造形作品に見る「見立て」の活動

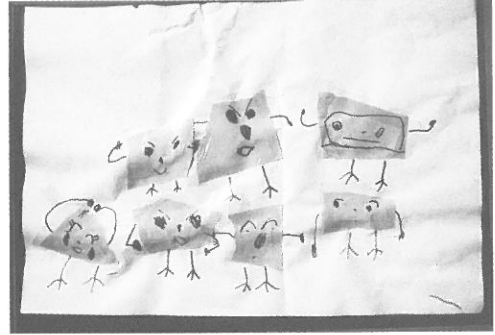
ここではより具体的に、子どもの造形作品の中に、どのように「見立て」の活動が現れているか見ていきたい。

子どもの表現、特に描画活動の始まりは、描かれたものに特に意味を持たない“スクリブル”“なぐり書き”から始まる。1歳前後から行われるこの種の描画活動は、その子どもの成長の過程での経験量を反映させながら、2歳を迎える頃、その描画の結果表れた作品の見た目以上に、その描画されたものの内容に劇的な変化が現れる。描くという行為自体が目的だったそれ以前の活動から、何らかの表現内容を含み持つものにその表現物は変化しているのである。

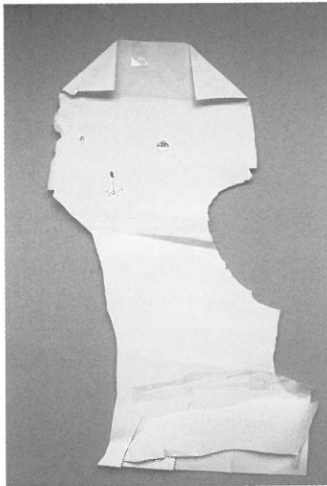
この表現物の変化を、「見立て」の活動との関連で考えてみると、この年頃の子供たちは、「頭の中に表現したいことがあってそれを表現しているのではない」ということに注意すべきである。描くという行為が楽しくて、たまたま引いた線、あるいは、その線を引いたときの身体的な動きを何かに見立て、その結果として表れた線や形に意味を持たせるのである。これが子どもたちにとって



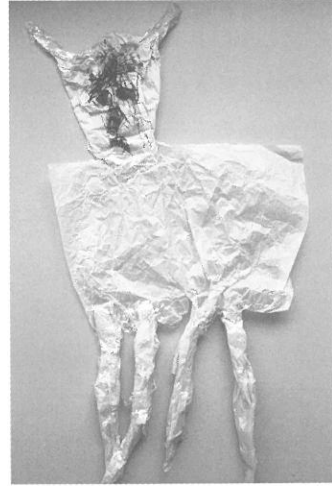
作品1 あかちゃん (2歳7ヶ月)



作品2 いろんなともだち (3歳2ヶ月)



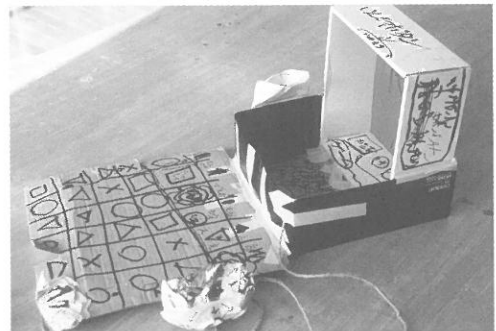
作品3 しろ (いぬ) (3歳)



作品4 バンビ (3歳10ヶ月)



作品5 ソフトクリーム (3歳9ヶ月)



作品6 デスクトップパソコン
(4歳5ヶ月)

の「見立て」活動の始まりである。

「作品1」は2歳7ヵ月の子どもの描いた「赤ちゃん」である。たまたま引いた線を後から何かに見立てる活動の次の段階で、自分が描いた“スクリブル”や“頭足人”と実際に描きたい目の前にいる“赤ちゃん”とを比べながら、目や耳、鼻や髪の毛が、擬似的に現れているものを自分の生活経験から探して引用する、典型的な「見立て」活動の結果現れた表現であることが分かる。「作品2」は3歳2ヵ月の子どもの作品である。単純な見立て表現であるが、自分の中から出て来た形を何かに見立てることで生まれた「作品1」の活動よりも、偶然他者から与えられた形を何かに見立てるという点で、より多くの生活経験や造形的な活動の経験を必要とする活動である。

「作品3」「作品4」は、自分から形を作り描画を加え、作品としたものである。「作品3」は3歳、「作品4」は3歳10ヵ月の子どもによるものである。これらの作品に見られる「見立て」の活動は、いままでよりも少々複雑なものとなっている。頭の中に、ある程度形を持ったイメージがまずあって、それを現そうとするこの種の活動では、見立てる活動は、表現すべき対象のその部位ごとに見立てが行われる。そして、見立てられた部位が組み合わされて作り出された表現物と、自分が頭の中に抱いているイメージとのずれを確認し、さらに見立てし直す。これらの作品は、このような作業を幾度か繰り返しながらものを作り上げていく活動の結果としての、いわば「見立て活動が重層した」作品となっている。特に「作品4」は、足や角の部分に見立ての活動が顕著に現れ、“作ったものを足に見立てる”→“イメージとのずれを確認する”→“さらに細くねじりより鹿らしい足に見立てる”といった一連の活動を繰り返しながら、自分の心の中のイメージにより近い形を追求していることが分かる。

「作品5」「作品6」は廃材を使った工作である。「作品5」は3歳9ヵ月の子どもが作った「ソフトクリーム」、「作品6」は4歳5ヵ月の子どもが作った「ディスクトップパソコン」である。これらの作品を見ると、作った子どもたちの生き生きとした生活経験の様子や、表現することへの愛着がよく表れていることに感心するとともに、子どもたちが様々なことを表現していく上で、「見立て」の活動が、いかに重要な役割を果たしているのかが分かる。

4 造形指導者のための「見立て」に着目したカリキュラムの提案と実践報告

さて、本論冒頭で取り上げたような本学での授業の経験と、子どもの造形作品に見る「見立て」の活動の分析結果から、幼児造形に携わるものを育てていく上で、指導者となるその本人が、この「見立て」の活動をしっかりと理解し、「見立て」を意識した造形活動を経験することが、実際に子どもたちの造形表現の指導や援助をしていく上で重要な意味を持つものと考え、表1に示すような、自然物を素材とし「見立て」活動にねらいを定めた“カリキュラムモデル”を平成14年に作成した。

このカリキュラムモデルを作成する以前にも、幾度か自然物を素材とした造形課題を設定して行った授業もあったが、それはカリキュラムのねらい自体を「自然物を利用した造形作品の制作」ということにおいていたため、使う素材は一緒でも学生にとっての授業の意味合いは、カリキュラム

モデル作成以後とは全く異なるものであった。

平成14年以降「見たて」の活動を経験するためのカリキュラムのおおまかな流れは、実施年度で多少の違いはあるが、およそ表1に示したカリキュラムモデルに基づいて行っている。

具体的には、カリキュラムの第一段階として、「見立て」活動の理解のために子どもたちの作品を見ながら「見立てる」ことが子どもたちの造形表現やその他の表現活動にどのように生かされているかを考える。次に、何かに見える自然物を探し「見立て」による制作活動の準備に入る。この段階では、“何かに見

える（あるいは、見えそうな）自然物を探し、最低限の加工を加えて、他の人も共感できるものを作ろう”と呼びかけておく。実際の制作に入ってしまうと、その加工が“最低限”という枠を超えどんどん複雑になっていこうと、決して止めないように心がける。これは、見立てから始まった活動が、制作者の造形的な思考にスイッチをいれ、主体的にイメージが次々に展開していく表現活動に没頭していくことを疎外することを避けるためである。ただし、矛盾するようであるが、あくまでも材料集めの段階では、「見立て」活動を十分意識し「見立て」による想像力を学生たちから引き出すために、“最低限の加工で”と言う一言を徹底させる必要があると現時点では考えている。

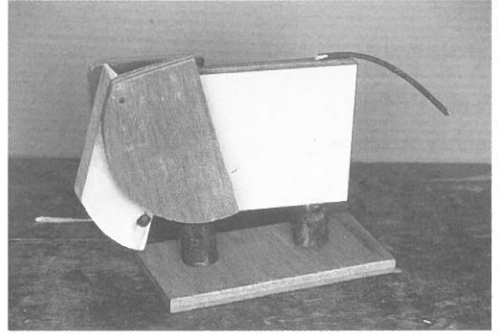
「作品7」～「作品13」は本学児童福祉専攻学生による自然物を素材とした見立て活動による作品である。「作品7・カンガルー」は、最もシンプルな制作の過程により表現されたものである。2本の木の枝分かれている部分を組み合わせただけでこの作品は作られている。「見立てる」ことがいかに表現として可能性を持っているか、あらためて考えさせる作品である。一方、「作品8・ぞう」は、木切れそれぞれの形を動物の部分に見立て組み立てることで作品として表現している。表面のテクスチャーの違いも見立てる活動に含ませることで視覚的な事柄だけに留まらず、触覚的な見立てまで行われている。以下「作品9」～「作品13」は、“最低限の加工”という条件から逸脱しつつも、見立てる活動が出発点となったことによる充実した表現活動の結果として、制作者自身が十分満足するもので、個性的でありながら鑑賞者をも納得させる力を持つ作品となっている。

表1 見立て活動による造形カリキュラムの流れ

	時間・場所	ねらいと活動内容
導入	第1週 造形教室	ねらい：見立てる活動の理解 ・子どもの造形作品の中の見立てる活動を考える。 ・子どもの実作品とスライドを見る。
制作の準備①	第2週 屋外 各自の活動	ねらい：見立てる活動を実際に行ってみる。 ・最低限の加工で作品を作ることを念頭に作品のベースとなる素材、自然物を探す。 ・探しながら実際に見立てる活動を経験する。
制作の準備②	第3週 造形教室	ねらい：使用する道具の扱い方を習得する。 (ここでは主に木工関係の道具と接着剤) ・道具の扱いを学びながら、見立てる活動を念頭に、自分の準備した素材にどのような加工を施すか考える。
制作①	第4週 造形教室	(制作) ・見立てる活動と加工のバランスを考えながら制作する。
制作②	第5週 造形教室 および屋外	(制作) ・最低限の加工からの発展段階。 ・加えていくものを見立てる活動をもとに考え、屋外に出て探し加工していく。
鑑賞	第6週 造形教室	(鑑賞) ・改めて見立てる活動を考えるとともに、お互いの作品の中に表れている個性的な表現を理解する。



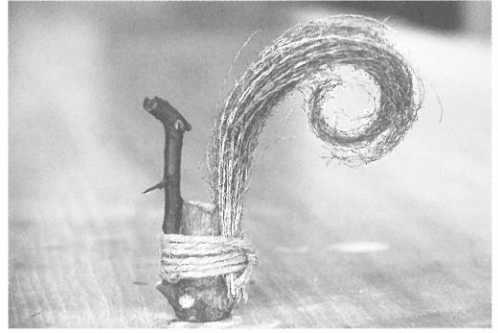
作品7 カンガルー
(学生作品、作品13まで)



作品8 ぞう



作品9 かぶとむし



作品10 りす



作品11 なまず



作品12 らくだ



作品13 ゴリラ

5 考察

これまで見てきたものは、造形活動に限られた「見立て」活動の様子であるが、「見立てる」活動と言うものは、造形表現だけに留まらず、様々な表現活動の基盤となるものにとらえることができる。そして、子どもに限らず大人も同様に、「見立てる」活動からは、組み立てる活動とともに、まねる活動も引き出される。そこから細部にわたる表現へのこだわりや、自分の思い描くイメージと自分が表現したものとの“ずれ”に気付くような、客観的な見る目を養うことになり、個性的な表現へと向かっていくきっかけとなる。

子どもたちの活動に限って考えるならば、子どもたちの生活の周辺にある植物など自然物は、子どもたちの既に持っている柔らかな発想力を持ってすれば、最も様々なものに見立てられることのできる素材の一つであろう。幼児造形に携わる者（あるいは、私たち大人）は、子どもたちの、このような力をさらに引き出すために、日頃から環境づくりにつとめ、庭木などを触って眺めたり、切り株や朽ち木など様々に変化する自然物に子どもたちの注意を向けさせたりするような、ものと出会う機会を作るよう心掛けていかなければならないのではないだろうか。このような経験が積み重なると、子供たちは自ずと、大人が思いもよらぬような「見立て」を行うようになる。単なる散歩が、子供たちにとっては充実した冒険遊びや発見活動となり、想像力を刺激する重要な活動となっていくのである。

6 おわりに

今回、本論で試みたような、子どもたちの表現の特徴を分析し、それを追体験するような造形教育のカリキュラムは、一般の造形表現の教育（幼児教育の分野に限らず、小学校からの学校教育の中での造形表現の教育）において、その造形に携わる者を育てていく上で、有効に作用するよう思える。今後は「見立てる」活動に留まらず、集中描法やその他の子どもたちに特有な造形活動に着目し、それを追体験できる課題の設定について考え、より充実した造形表現がそれぞれの年齢層で可能になるようなカリキュラム作成のための研究を続けていきたいと思っている。

参考文献：

「幼児の造形—造形による子供の育ち—」 野村知子 ほか 保育出版社 2002年

「芸術遊び」 ウド・リーベルト 日本文教出版 1996年

「触覚表現に着目した造形表現の研究」

関崎哲 岡山県立大学短期大学部研究紀要第11巻 2004年

関崎 哲

〔2004年10月31日受付〕
〔2004年12月25日受理〕